
蒼穹と紅蓮のクアンタム

紅蜥蜴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹と紅蓮のクアンタム

【Nコード】

N70340

【作者名】

紅蜥蜴

【あらすじ】

異種との対話を終えた刹那が群雄割拠の時代へとダブルオークアンタと共に飛ばされる、それも孫呉の孫策（雪蓮）の元へ。こちらが主ではないので更新は他より遅いです。

プロローグ 対話から…（前書き）

主にしている連載のちょっとした息抜きでやっていきます。

最初からネタバレ全開ですので注意してください。

ミスマッチなのは解っていますのでそこを突っ込まれても答えませ
ん。

プロローグ 対話から…

破壊

「俺は戦う事しか出来ない破壊者、だから戦う、争いを生み出すものを倒す為に、この歪みを破壊する！！」

再生

「そうだ、未来を創る為に、俺たちは…変わるんだあああああああああ…！！！！！！」

理解

「俺にも…生きていく意味があった…。」

戦っただけの人生だった俺、そんな俺も戦わずにELSたちとの対話が終わって地球に帰ってきた時には既に50年が経過していた。

年齢は既に70歳は越えている。

姿が白髪以外あの頃から変わってないのは、

もう嘗ての仲間たちは老いているか、生きていないだろう。

当然、昨日会ったマリナも老いていた。

だけど、時間が掛かっても漸く彼女に言いたかった事が言えた。

「貴女の言っていた事は正しかった」

彼女もまた、過去に俺が言った事を覚えていてくれて、そして認めてくれた。

お互いに分かり合う事が出来た瞬間だった。

そして、それが出来た後にマリナに最後の別れを告げて俺はELSたちが装甲の変わりになって姿の変わっているダブルオークアンタに乗り込む。

これからは、ELSたちの元で生きていく。俺たちも彼らも共存しているのだから、彼らの元で生きていくのもまた当たり前だ。

そうしてハッチを閉め、起動させた瞬間…

「なっ!?!?どういこと…っわあああああああああ!?!?!」

何かに吸い込まれて機体ごと何かに飲み込まれてしまった。

く雪蓮く

それは突然のことだった。

空から大きな流星が私と祭が見回りをしてた付近に落ちてきた。

余程大きなものが落ちたせいか、落ちた場所一帯の木が折れ、粉塵が巻き起こっていた。

「けほけほっ、策殿、大丈夫か!?!」

「いつつつ、大丈夫よ、それより行きましょう!」

すぐに向かおうとしたら、祭が私の左肩を掴んで止めてきた。

「いけませぬ、策殿はこれからの孫呉復興の為に必要なお方。何か

あつては堅殿に申し訳が立たん！」

言っている事は分かるが、何が落ちたか興味がある私は本能の赴くままに走って行く。

「ああもつ、お待ち下され策殿！」

走って行くうちに粉塵が止み、私の目の前に飛び込んだのは…

青と白を基本とした鎧のような体と左肩に付いた大きな盾を巨人が片膝を付いてまるで私に頭を垂れるように佇んでいた。

でもそれ以上に特徴的なのは何を素材にしたのか分からない緑で透明な刃の付いた剣が左肩の盾に付いていた。

そして、その右手に盾に付いた剣と同じ素材の大剣を握っている。

「な、何これ…！」

人間と呼ぶにはあまりにも大きく、またあまりにも異質だった。

私は巨人の大きさに圧倒されて、口を大きく開けて啞然とするしかなかった。

「ぜえぜえ……策殿、この老軀をいじめる真似は…な、何と！」

息を切らせながら私に追いついた祭も驚愕の表情で青と白の巨人を見つめる。

「祭、これはどう考えても…!」

こんな巨人はまず見たこともない。祭もそうだろう。

これが管輅の占いで出ていた天の御使いなのだろうか？

「うむ、天の御使い、のようじゃな。しかし、でかすぎるのお…!」

ただ、これだけでかいと目立ってしまう。袁術に見つかったら孫呉復興に支障が出てしまう。

「これは一刻も早く隠さないといけない…!けど、その必要は無さそうね。」

私の視線の先には巨人の腹部、そこでお腹に付いた鎧のような部分がそれぞれ上下に避けていく。

中に何となく人が居そうな気がして、駆け出していく。

「策殿、何を言って…!?!?ってまた先にしもうた!」

祭に構わず巨人の足をよじ登って巨人のお腹の部分へと辿り着く。

すると、そこには青い変わった鎧を着た人が顔全体を覆う兜らしきものを被りながら気絶していた。

「変わった鎧ね。それとも服…ではないわよね。さて、天の御使いが男だったらいいんだけど、なっと!」

紫の透明なガラスのようなものに顔が覆われていて、どんな顔なのか分からないため兜のようなものを脱がす。

露になった顔立ちは正にカッコいい男、天に本当に感謝するわ。

「わあ〜！祭、ちょっと運ぶの手伝って。中に人が居たわ、しかも男よー！！」

「何じゃと！？今すぐ行くから少し待っておれ！」

男だったら、その血を孫呉に入れることで孫呉の未来は安泰になる。

この巨人と天の御使いで孫呉復興は益々現実に来る！！

でもまずは目覚めたら冥琳と一緒に尋問しないとね。

ブログ 対話から…（後書き）

最初に言っておきますが、基本的にダブルオークアンタで戦う事は
ありません。

クアンタは戦い以外で使います。

後はイメージカラーで青なら魏だろと思う人も居るかもしれませんが
が、ここは私の好みを優先させてもらいました。

魏には一刀がいるという設定です。

理由はそれだけではありませんが、それは後程語ります。

呉01・孫呉との出会い（前書き）

感想にテイエリアが抜けているという指摘がありました。今回最終決戦のからその後のことも書きましたので確認下さるようよろしく願います。

それどころか私も予想してなかった話の内容になってしまいました。

それにおかしいところも多々あるかも…。

呉01・孫呉との出会い

（刹那）

”クアンタごと飛ばされた後”

俺が目を覚ますと、クアンタはなく、何故か2つのGNドライブとヴェーダの小型ターミナルユニットが俺と一緒に浮いていた。

ヴェーダの小型ターミナルユニットとは対話のすぐ前にテイエリアがイアンたちに頼んでクアンタに取り付けたヴェーダの接続端末だ。対話の際にはELSから送られる情報を受け止めて整理などのテイエリアが俺をフォローする際に使用された。対話が終わった後はテイエリアが肉体を創り出して外宇宙航行母艦『スメラギ』に乗り込んだ為、機能してない。

ELSによって金属化していた体は、白髪以外元の状態に戻っていた。

だがそれ以前に青い光が満ち溢れたこの空間には見に覚えがない。

> あら、やっと気が付いたのねん？<

突然、持っていた携帯端末の通信が開き、手に持つと映像が出る。

そこには…筋骨隆々だが、禿げた頭に左右に三つ編みでピンクリボンで結んである黒い髪、たらこ唇が特徴的な…ある意味人間と疑い

王 留美、そして一応アレルヤの出身国だということ、武力介入したことで中国に触れる機会はなかった。

歴史については簡単に、文化については食べ物以外はほとんど分からない。

>その異端者は貴方のお仲間のティエリアと同じイノウェイドー…だったかしら。そいつが外史にやってきて外史を滅ぼそうとしているのよ。<

何故ティエリアのことを知っているのかは敢えて聞かない。

「それで、俺にその異端者を倒して欲しいということか。あとイノウェイドーではなく、イノベイドだ。」

>そうよお。その異端者はガンダム…つまりは貴方たちが使っている兵器も持っていて、外史に住んでいる人たちでは全く歯が立たないのよ。しかも、生身でもすごく強いし何か特殊な力を持っていて、その力で世界の干渉を無効にしちゃってるからお手上げなのよん…。

<話から察するに、どうやら戦闘型イノベイドのようだ。

イノベイドの種類は対話の前にティエリアから教えてもらったことがある。

それとイノベイドは覚醒すると、個々に特殊な力を発揮することも聞いている。

>そうそう、貴方の機体を形成していたエルスと貴方たちが呼んで

いるものたちは貴方のいた世界に置いてきたわ。流石に連れて行っちゃったら、彼らとしても色々面倒なことになっちゃうからねえ。<

ELSについては仕方ないだろう。俺も仲間となった彼らが迫害に遭ったりするのは望まない。

中国の過去の世界を元にしたとなればELSたちを受け入れてもらうのは不可能だろう。

「だがそうになると、このツインドライヴもターミナルユニットも機能しない。」

いくらなんでもこれではMSを倒せないし、

>機体は大丈夫よ。これで…ぶるああああああああああああああああああああああああ！！！！！！<

男が地響きを起こせるぐらいの叫び声をあげると、ツインドライヴの中心から光が拡がり、収まるというのまにかダブルオークアンタが宙を浮いていた。

…もう、あまりにぶっ飛んだことばかりが起きすぎて突っ込む気にもなれない。

>はあ、はあ…成功したと思うけど一応作動するか確認してね…。<

何かエネルギーを使ったのか、疲弊しながらもウィンクをする男に少し寒気を感じながらクアンタに乗り込む。

「GNシステムリポーズ解除、プライオリティーを刹那・F・セイ

エイへ。」

念のため、起動するかどうか慎重に確認する。

見事に起動し、周囲のカメラ類に周りの光景が映る。

「それで、どうすればいい。」

携帯端末を片手に持ち、さっきの男に聞く。

>そのままであれば大丈夫よん。でも、この機体は異端者との戦い以外での戦いとかで使っては駄目よ。そんなことしたら、今度は貴方を排除しなきゃなくなるもの。 <

それも仕方ないことだろう。この機体は戦いに使えば地上を荒らしてしまうこともある。いくら気を付けてもないとは言い切れない。

「なら戦い以外でなら使えるのか？」

>移動とか、対話とかなら大丈夫よん。ついでに言うとソレを使って元の世界に帰ることも出来るわよん。でもそれだと貴方の武器は銃だけになっちゃうでしょ？ <

その通りだ。あっちでは銃弾は作れないから迂闊に使えない。

>だから、サービスで機体の武装……7つの剣をあなた本人が使えるようにしてあげるわよん。 <

剣といったらGNソードVとGNソードビットか。

「分かった。」

>そろそろ着きそうねえ。それじゃあ、お願いねえ。あと、私の名前は貂蟬よお。<

携帯端末が切れて、眩しいぐらいの光が広がり、俺の意識は落ちていった。

気が付くと俺はベッドで寝かせられていた。だが、部屋を見ると俺が今までいた世界にはなかった様相をしていた。そう、中国にあつたような装飾などが多く見受けられる。

窓から見ると朝なのか明るく、小鳥の囀りが聞こえる。明らかに地上にるのが分かる。

ならば、外史というのはどういうことだろうか？

「うむ、気が付いたようじゃのう。」

窓とは反対側から声を掛けられたのでその方向に顔を向ける。

そこには紫のチャイナドレスを着た白髪で褐色の肌の妙齡の女性が立っていた。

おそらく対話の時のスメラギヤリндаとそう歳は違わないだろう。

「気分はどうだ、怪我はしとらんか？」

そう言われて半身を起こし、自分の体の状態を確認する。

特に怪我も無い、いや少し後頭部が痛い。

あとはパイロットスーツのままであること、白髪が元の黒髪になっていること以外は特に問題は無い。

「後頭部が少し痛いが大丈夫だ。」

「ああ、やはり駄目じゃったか。実は気絶しているお主を巨人の腹の中から引き摺り出す時に誤って地面に落としてしまったの。それで痛み止めの薬を塗っておいたのじゃが勢いよく落としてしまったから心配しておった、すまぬの。」

頭を下げ謝る女性。

だが、MSで長く戦っていたこともあって、強い衝撃などに体が幾分耐えられるようになっていた。

「いや、それは特に問題は無い。それより助けてもらったお礼と言つては何だが自己紹介をさせてもらおう。…俺の名前は刹那・F・セイエイ、刹那と呼んでくれ。」

「姓が刹、名は那、字はえふ？真名はせいえい？変わった名前じゃないの。」

そうか、文化の違いで名前の呼び方も違うのか。

「違う。刹那が名前、Fがミドルネームという中間の名前、セイエイが姓だ。それより、真名とは何だ？どうやら俺とこの土地の文化

は違うのか、馴染みがない。」

それ以前に過去の中国にもそんな名前の呼び方はなかったはずだ。

何よりあるならアレルヤはともかく、王 留美にそういうものがあるか知っていてもおかしくない筈だ。

「何じゃ、真名を知らんとは。真名とは本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く真名で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるぐらい大切な名前じゃ。当然、わしにもある。」

なるほど、迂闊に呼べない名前という訳か。いいことを聞いた。

「なら刹那が真名にあたるという事になるな。」

本名はソラン・イブラヒムだが、その名は既に捨てている。それに刹那の方が馴染み深い。

「何と、それは失礼した。わしの名は黄蓋、字は公覆。真名は祭さいじや。祭と呼んでよいぞ。わしも刹那と呼ばせてもらうからの。」

漸く名乗りが終わったので次の話をする。

「ここはどこだ？」

「ここは荊州南陽。我が主、孫策殿の館よ。」

孫策…確か西暦200年ぐらいの後漢の呉という国の武将として名高い人物だったはず。

という事は目の前の祭は本来男のはず。

これが外史と呼ばれた理由か。

という事は…

「…孫策の親は孫堅か？」

「そうじゃ、策殿の母君が孫堅。…やはりお主は天の御使いなのじゃな。」

「おはよう、気分はどうかしら。あら、目覚めたのね。」

天の御使いについて聞こうとした時、この部屋のドアが開かれ、そこから胸の辺りが際どいチャイナドレスを着た俺とあまり歳の変わらない淡い桃色の髪と褐色の肌が特徴的な女性が入ってきた。

「策殿、冥琳からまだ入らぬように言われたではありませんか。」

「いいじゃない。それに私から色々言うこともあったし。」

女性は祭の近くまで歩を進める。

「後頭部が痛い以外は問題ない。あんたは？」

「私の名前は孫策、字は伯符。私と祭とあと一人、ここに来るから…と思ったら来たわね。」

この女性が呉の小霸王と呼ばれた孫策か。

そう思っていたら、ドアからまた人が入ってきた。

今度は胸元の開いたドレスのような赤い服に日本の昔話に出てくる天女が付ける羽衣、長い黒髪に孫策や祭と同じ褐色の肌で俺ほどの身長ではないが長身、そして四角の赤いフレームの眼鏡と特徴がこれまた多い女性が入ってきた。

「雪蓮、まだ入っては駄目だと言ったでしょ！」

孫策は叱られてブーブーとぶーたれている。

「全くもう…。」

「冥琳、せっかくじゃから自己紹介がてら尋問も始めてはどうじゃ？」

「そうだな、私は周瑜、字は公瑾。」

「俺の名前は刹那・F・セイエイ。刹那が名前だからそちらで呼んでくれ。」

「策殿、冥琳、刹那の名前はわしらのとは違うところがある。セイエイが姓で、えふが…えつと、何じゃ？」

「Fがミドルネーム、つまりは中間の名前という意味だ。だがこれで普段呼ばれることはない。」

「そうか、それだけでも文化が違うようだな。なら質問に入る。」
周瑜は真剣に俺の話に耳を傾けている。二人より生真面目な性格だ
ということが窺える。

「まずは生地を聞かせてもらおう。」

生地…。早速答えづらい言葉が来たな。

「ここよりずっと西、砂漠と荒野が多い土地で生まれた。」

それを聞いた三人の表情が一気に険しくなった。

「では五胡が出身地なの？」

五胡の事は詳しく知らないが、誤解されているのは間違いない。

「違う。その五胡とは何ら関係ない。」

そう言っても三人とも納得してない。

「なら違うという証拠を見せてもらわないことには納得出来ないわ
ね。」

「もし五胡、あるいは妖怪の類であるなら…死んでもらうことにな
る。」

孫策は物騒なことを言いながら持っている剣に手を掛けようとする。

だが、そこで以外な助け舟が来た。

突然、懐から携帯端末に通信が入ったという知らせのアラームがピピと鳴った。

「何の音じゃ？」

「すまない、俺のだ。」

誰かは分からない、それ以前にこの世界に来て通信が入るとは思わなかった。

とにかく、端末を取り出しモニターを開く。

>よかった、出てくれたか。今どこにいるんだ？<

出たのはティエリアだった。

「な、何、突然人の顔が映った!？」

孫策は驚愕の表情でモニターも見る。だが好奇心旺盛なのか、目を輝かせながら見ている。

「俺も信じられないが、平行ワールドにいるようだ。」

冷静に言っているが、孫策がモニターに顔を近づけているため、少し気が散っている。

>平行ワールド…こっちに帰れるのか？<

「一応は帰れるらしい。だが、ここでやることが出来た。詳しくはあとで連絡する。それより、どうやって繋がったんだ？」

「クアンタに搭載されていたヴェーダの小型ターミナルユニットを介して通信回線を開いたんだ。だが、パラレルワールドだということならターミナルユニットがあっても通信を開くことは出来ないはずだが…。」

「分かった、今はあまりゆっくり話すことは出来ないから一旦切る。」

「そう言っただけで通信を切ると、さっきまで孫策以外は険しい表情をしていたのが、今は冷静にこっちを見ている。」

「おほん、さっき証拠と言ったのだが、私達にも五胡にもああいうことも出来ないし、何よりあの蒼き巨人が何よりの証拠になることを忘れていた。許してくれ。」

周瑜が頭を下げて謝る。

「いや、疑いが晴れたのならそれでいい。で、天の御使いとは何だ？」

「ああごめんごめん、話が脱線しちゃったわね。管輅の占いで『天より降りしその者はこの戦乱の世を治めてくれるだろう、ある時は蒼き巨人、またある時は緑の巨人、またある時は白き羽衣を携えて舞い降りる』ってというのがあって、貴方が入った巨人が私が巡回していた途中に流星のように落ちてきたのよ。あの時は吹き飛ばされるかと思っただわ！」

蒼き巨人は間違はなくクアンタ、白き羽衣は知らないが、緑の巨人というのが気になる。

「でなんだけど、刹那はどのくらい戦ったの？」

孫策は笑顔で、しかし殺気を以って俺に聞く。

「一応今の俺は対話の時…つまりは23歳の時の容姿だ。

「…20年近くだ。俺の人生は戦うだけの人生だったからな。」

50年はELSとの対話に費やしたが、残りは正に戦いに明け暮れる日々だった。

「…どうやら本当みたいね。殺気を向けても全く動じないんだもの。というか逆に私の方が参っちゃいそうよ。」

殺気を向けた覚えがないんだが、どういうことだろう？

「で冥琳よ、こやつの処遇はどうする？」

「私は何も問題ないと思います。彼の人格、彼が私たちとは違う人間、彼の我々にはない知識、そして雪蓮の殺気に動じない精神の強さ、問題になるところがないどころか我が孫呉に欲しい人材です。あとは雪蓮次第ですね。」

「私は問題ないわ。…それにしても、やっぱりかっこいいわね。」

「それはわしも思っていたぞ。なかなか見所のある男じゃ。」

「なら真名を教えてあげる。私の真名は雪蓮よ。」

「そういうことなら私も。私の真名は冥琳だ。よろしくな刹那。」

冥琳が手を伸ばしてきたため、俺も握手をする。

「ふふ、刹那、あなたを条件付きで保護してあげる。」

正直、住む場所があるのはありがたい。勉強しなければ話が出来ても言語の読み書きが出来ないのは色々苦労するからだ。

しかし条件か…それはそうだ、ただで保護などこの荒れた世界では考えられない。

「一つは貴方の持つ知識を我が国孫呉の為に役立てること。」

これは問題ない。MSのことを教えたところで悪用も生産も出来ないのだから。

「二つは、私達呉の武將を口説いてまぐわって。」

これも問題…ん？

「すまない、二つ目をもう一回言ってくれ。」

「だから、私達呉の武將を口説いてまぐわってね。勿論、それぞれの同意を得てからよ?」

これは俺にとって、対話や戦いよりも困難なように聞こえた。

ここから、俺の新たな絆と戦いが始まった…。

だが……早速前途多難になってしまった…。

.

呉01・孫呉との出会い（後書き）

次は刹那が雪蓮たちと一緒にダブルオークアンタのある場所へ行きます。

次も今後の話の基本を含んだ内容なので出来るだけ早く更新しますが、その次からは更新が不定期になると思います。

呉02・蒼き巨人〜00 Quant〜（前書き）

お待たせしてすみませんでした！

漸く更新出来ました。

ですが、活動日誌にある通り、余裕が無くなっています。

なので、卒業論文が終わるまでこっちの小説は更新出来ませんので
予めご了承下さい。

く刹那く

雪蓮から保護する条件を聞いて啞然としていた俺だが、結局他に宛てもあるはずも無かったので少し渋々だが了承した。

そのついでに雪蓮が「刹那だったら、いつでも良いからね。」とウインクしながら言っていたが、冥琳が「私も一応賛成だが、無理にやろうとはしなくていいぞ。」とフォローしてくれたことで漸く我に返った。

「俺と子どもを設けたいということだが、目的があるのだろうか？」

正直、あまりいい目的ではないのは予測出来る。しかし、この時代と俺がいた時代はあまりに考え方が違う。何より、ここでの語学などこの国の知識に疎い。

だから無闇に否定しない方がいいだろう。

「勿論よ。天の御使いの血を孫呉が受け入れ、子孫を残せば権威で逆らうものも少なくなる。でも誤解しないで欲しいのは、権威が目的ではなく、それによって統治がしやすくなり、犠牲も少なくなる。」

要は結果的に平和に繋がるということか。

「そういうことなら構わない。」

当たり障りなく答えたつもりだったが、雪蓮は何が気に入らなかったのか頬を膨らませて苛立ちの表情を見せる。

「むっ！何、刹那はこれだけの美女に囲まれてそんな無表情なんてもっと慌ててくれてもいいじゃない！！」

「すまない、あまりそういうことはよく分からないんだ。」

実際は戸惑っているのだが、ややこしくなりそうなので伏せておく。

「はあ、お主は鈍いのお。策殿、これはある意味苦勞しそうじゃのう。」

祭が溜め息混じりに言ったことに同意した雪蓮も溜め息を吐く。

「苦勞するのはこっちです。二人とももう少し私の苦勞を勞ってくださいませんか？」

二人が溜め息を吐くのを見て冥琳も二人に対して愚痴を言い出す。

「…ってこうしている場合じゃなかったわ！刹那、早速だけど、貴方にあの蒼い巨人をどうにか隠してもらいたいのよ。あの巨体を袁術に見つけられたら大変よ。」

たとえ俺しか動かせなくても、民間人にとっては下手をすれば大軍よりも脅威的なものになるだろう。

実際、クアンタ…いや、ガンダムの装甲はEカーボン製でGN粒子

をコーティングすることによってビームにもある程度耐えられるぐらいの強度を誇る。

到底この時代の武器で壊せるものではない。

「了解、すぐに向かおう。」

雪蓮に賛成なのか、祭と冥琳も何も言わない。

「祭、穩を連れてきてもらえる？あの子にも見せておきたいからね。」

「心得た。見つけ次第、巨人の座るところへ向かおう。」

祭は駆け足で部屋を出て、穩と呼ばれた人物を呼びに行った。

「お願いね。私達は兵士を沢山連れて巨人を運びましょう。」

「いや、その必要は無い。俺が動かして移動させれば、問題はない。」

「そんなことが出来るの？」

「むしろお前たちが言っている巨人…ダブルオークアンタは俺しか動かせない。それに数人なら掌に乗ってもらえればまとめて移動できる。」

「分かったわ、なら冥琳。」

「分かっている。…誰かある!」

「はっ！」

冥琳が呼び出すと、ドア付近にいた兵士がこちらに向いて指示を待つ。

「黄蓋殿に『兵士は連れて来ず、穩だけ連れて来てくれればいい』と伝えてくれ。」

「御意！」

兵士は冥琳の伝言を聞いてすぐに祭を探しに行った。

「それにしてもあの巨人、だぶるおー…くあんたって言うんだ。でも面倒だから“クアンタ”で良いわ。」

雪蓮は喋りなれない言葉だからか、確かめるようにクアンタの名称を言う。

「その、クアンタとは天の世界ではいくらでもあるものなのか？それに剣を持っていたから、兵器なのだろう？」

「いや、あの機体は俺専用のガンダムだ。そしてクアンタは兵器だが、それだけではない。」

「がん…だむ？それに兵器だけじゃないって他に何かあるの？」

雪蓮と冥琳が興味津々に聞いてくる。

特に雪蓮が初めてエクシアを見たときのような好奇心な目をしていた。

「二人とも、興味があるのは分かるが、先に祭が来て待たせていては彼女に失礼だ。」

「そうね。雪蓮、行きましょう。」

雪蓮も冥琳の言葉に納得して、俺たちはクアンタが落ちた場所へと向かう。

雪蓮たちの館を出て1時間程歩いて、座りながら佇むクアンタの元に着いた。

すると初めてクアンタを見た冥琳は口を大きく開けて見上げながら感動していた。

「これが蒼き巨人…正にその通りね。それにあの右手の剣と左肩の盾に付いてる剣に使われている刃はどの勢力でも作るのとは不可能でしょうね。あんなに透き通った緑の宝石のような剣は宝剣と言っても良さそうな出来ね。雪蓮の言った通り、ここに置いておく訳にはいかないわね。」

「改めて見ると凄いわねえ…。でも、祭と穩はまだ着いてないようね。」

雪蓮がクアンタの周囲を見るも、祭の姿が見えない。

「ん？あそこにあるのは剣じゃないか？しかも、7本もあるぞ。」

と冥琳がクアンタの足元を指差しているのを見ると、そこには人が扱えるぐらいの大きさになった長短の分かれた3種類のソードビットが2本ずつ、中心に地面に刺さっているGNソードVを囲むように配置されていた。

「あれってクアンタに付いている剣と同じじゃない？」

これはおそらく、貂蟬が創ったものだろう。あるいは誰かに創ってもらったのだろうか？

そんなことを気にしても仕方ないので、GNソードVとソードビットが刺さっている場所へと向かう。

「雪蓮、俺が中心の剣を引き抜くから、その後足元にある剣を引き抜いてみてくれ。」

俺に指示された雪蓮が足元の短い方のソードビットを座って見ると眉尻を下げて困ったような顔になる。

「…でも、この剣というか周りの剣は柄が無いわよ？」

「雪蓮、まずは刹那を見ていきましょう。」

俺は二人のことは気にせず、GNソードVを引き抜く。重さはあまり感じず、すんなりと。

どうやらgn粒子でコーティングをしてあるらしく、質量軽減の効果も働いているようだ。

「やっぱり凄く立派ね。岩も切れちゃいそう！」

「なら雪蓮、試しに持ってみてはどうだ？」

他人にもGNソードVが使えるかどうか試してみるため、敢えて雪蓮に渡してみる。

「どれどれ？…うそ、南海霸王より長いのに軽い！！ちょっと冥琳も持ってみて！」

「でも私はあまり力はない…分かったわ。」

雪蓮は興奮気味に冥琳にGNソードVを渡す。冥琳は渋々柄を掴む。

すると、冥琳も雪蓮と同じように目を見開いて驚く。

「本当に軽い！これなら片手で振っても重さに振り回されることもない。」

冥琳は思わず横に縦に振ってしまい、危うく俺に当たりそうになった。

その俺は左手で長い方のソードビットの柄を掴んで刃を受ける。

「気を付ける冥琳。」

「う、ごめんなさい…つい…。」

「もう駄目よ冥琳、子供じゃないんだから。」

雪蓮が悪乗りして冥琳を責めているところに祭と10代後半から2

0歳ぐらいに見えるのんびりとした空気を醸し出している女性が歩いて来た。一番近いのはリンダだが、彼女の雰囲気はより伸び伸びしている。

正直ああいう雰囲気はあまり慣れない。

「全くじゃのう。」

「でも珍しいですよね、普段は冥琳様が怒る方なのに。」

祭も隣の女性も面白そうに冥琳を見る。

「あら、来たのね祭、穩。」

「はい、たった今到着しました。」

俺は三人が喋っている間に、冥琳からGNソードVを受け取る。

「しかし、何じゃその剣は。随分変わった形しとのう。」

祭はまだ地面に刺さったままの5つのソードビットを見る。

「祭、見覚えはない？」

「見覚えなど…何じゃと!？」

剣の正体に気付いた祭は驚愕の表情で地面とクアンタにマウンツを覗いている方のソードビットを見比べる。

「同じ剣が蒼い巨人にも付いてますね。しかも大きさ違いで。」

「こら穩、刹那に挨拶しなさい。」

「ああ、すみませうん。私は姓が陸、名は遜、字は伯言、真名は穩です。」

冥琳に促され、穩が俺に挨拶と自己紹介をしてくれた。

「俺の名前は刹那・F・セイエイ、刹那で呼んでくれ。それと祭も聞いて欲しいんだが、蒼い巨人と呼ばれているのは、ダブルオークアンタという名前がある。」

「そのままだと面倒だからクアンタでもいいわよ?」

俺もクアンタのことを言いがてら自己紹介をする。そこに雪蓮が割り込んでくる。

「分かりました。よろしくお願いしますね。それで早速移動するんですけど、刹那さん、どうしますか?」

「まず、俺がクアンタに乗り込み、左手を下ろす。その左手に剣を全て乗せてくれ。次に乗せたところで、4人とも右手と左手に乗ってくれ。」

「左手はともかく、右手の剣はどうするんだ?」

質問したのは冥琳。最もな疑問だ。

「それは腰に取り付けることが出来るようになっていいるから大丈夫だ。だが時間を少し掛けてすぎている、急ごう。」

俺は雪蓮たちの返答を待たずにクアンタのコクピットまで跳んでいく。

コクピットに乗り込んだら、コクピットハッチを閉め、システムのリポーズ（英語で休止だが、ここでは太陽炉以外のシステム停止を意味する）を解除、起動させる。映像が出たところで、足元にいる雪蓮たちを見て、外部音声を入れる。

「皆少し下がってくれ。」

雪蓮たちは驚くが、すぐに離れてくれた。

離れたところで、GNソード？を左の腰のサイドアーマーにマウント、クアンタの左手を掌を上にする。

そこに小型化したGNソード？とソードビットを全て置き、開いた右手に冥琳、祭、穩が乗るが、一人しか座れるスペースがなかったため、右手に穩が座り、胸部の白いクラビカルアンテナに冥琳と祭がしがみ付いている。

そして雪蓮はというと...

「ふう、掴むところが多くて助かったわ。」

クアンタの足を登って、コクピットの辺りまで来た。そのままでは

危ないため、已む無くコクピット内部に入ってもらった。

「へえ、中はこうなっているのね。しかも、どうやっているのかは知らないけど外が見えるわ。」

「出来るだけ俺の後ろにいて欲しいのだが…。」

「うーん、いやよ、足が痛くなりそうだし。刹那の前にするわ。」

と言って、俺の首に手を回しながら膝の上に座る状態になっている。

「その兜ちようだい！…うーん、でも髪飾り外したくないし、止めた！」

座る際に被っていたフルフェイスのヘルメットを取られて雪蓮が被ろうとしたが、髪飾りが邪魔になり被れず座席の後ろに置かれた。クアンタに人を乗せ、ここまで好きに動かれたのは初めてだがあまり気にしない。

本音を言えば、動きにくく正面のディスプレイが見づらい。それと名前は分からないが花の香りがする。

あとは密着しているせいか、胸が当たっていて、内心動揺している。

「冥琳、祭、穩、なるべくゆっくり動くが、落ちないように気を付けてくれ。」

どうにか平静を装い、外の三人の様子を確認する。

大丈夫だ。

いつでもよいぞ。

私も大丈夫ですよ。

「雪蓮もいいな？」

「ええ。」

「ダブルオークアンタ、刹那・F・セイエイ、これより雪蓮たちの館に向けて飛翔する。」

四人の是非を確認したところで、機体を上昇させクアンタが両手で抱える格好で発進する。

（雪蓮）

私は今、蒼い巨人の『クアンタ』の中にいる。

独特のヒュオオオオオオオオオオオという音が聞こえてくるのは刹那曰く「動力が回転して動いてる音」らしい。

思ったより狭いが、仕掛けが色々とあるようで面白そう。

「ねえ、押してみてもいい？」

と前の箱のようなものにある指で押せそうな箇所を指差してみる。

「駄目だ。今押すと冥琳たちが落ちてしまう。」
つまんない、と言いたいところだけど、今周りの山よりも高い位置を飛んでいる。

流石に本当に落ちたら死んでしまうから止めておこつ。

それにしても…こうして空から見ると、私達が住むこの土地ってこんなに広がったのね。

これで漸く孫呉復興の夢が始まる。まずは力を付けないとね！

「おい雪蓮、右手を押すな！」

気付かないうちに刹那の右手に手を重ねていて、それと共に手で握っている船でいう舵らしきものを押して動いてしまう。

「へっ、ひゃあああああああ！？」

すると、いきなり馬が走るより速く右回転し始めてしまった。

あまりの速度に悲鳴をあげてしまう。

（なっ、きゃあああああああ！）

（おっ、速い速い！もっとやれい！）

（落ち、落ちちゃいますっつっつっつっつっつっつっつ！）

「くっ、雪蓮早く手を離せ！」

刹那に言われてすぐに手を離したら、刹那が押ししてしまった舵を引いて元の速度に戻してくれた。

「ふう、三人とも大丈夫か？」

（わしは大丈夫じゃ。穩は大丈夫か？）

（目…目が回ってますが何とか。）

（……………うっ。）

祭と穩は返事をしてくれたが、冥琳の返事がない。

ていつか祭私だって気分が悪いのによく平気よね…。

「冥琳？」

「気持ち悪くなったのか？」

（…うっ、ひっく、聞こえていたぞ雪蓮。後で、覚えていなさい…。）

冥琳はどつやら怖かったらしく、涙声ながらドスが利いた低い声で私に死（という名の説教）を宣告した。

「…自業自得だ雪蓮。それと後ろにいてくれ。」

「…うめんなさー。」

今度は刹那の言うことを大人しく聞くことにした。

…ああ、後が怖いわ…。

〈刹那〉

雪蓮のせいで一悶着あったもののその後は無事に館の入り口付近に到着した。

ただ、雪蓮だけは到着した後もずっと暗かった。余程冥琳の説教が嫌なのだろう。

「誰かある！…そこに置いた緑の刃の剣を天の御使いの部屋へ運んでおいてくれ。重さはそんなに無いがよく切れるから三人ぐらい呼んでから行ってくれ。」

「はっ！」

だが被害者の冥琳は冷静に兵士を呼んで予め地面に置いたソードピットを運ばせていた。

「うっ、気分が良くありません。」

「ええい、情けない！穩、しっかりせい！…！」

「祭さんがおかしいんですうっ…。」

祭は気持ち悪くなってへたり込んでいる穩に何故か説教している。

その光景を見て思わず苦笑してしまう。

「さて刹那、雪蓮の説教は後で出来るからいいけど、クアンタをどうやって隠す？」

冥琳は隠し方を聞いてくるが、もう既にどうするかは決めている。

「クアンタには姿を見えなくする機能もある。少し待ってくれ。」

正確には迷彩被膜と言って、主に粒子の特性である通信やレーダーだけでは隠れきれない、または逆にその特性を利用して発見されないように視覚で隠れる機能である。武力介入開始時は待機時などによく使っていたが、ダブルオーガンダムに乗り換えてからはほとんど使わなくなった。

それでもクアンタにもその機能は搭載されている。

「GNシステムリポーズ開始、迷彩被膜展開。」

俺の指示でクアンタは姿を消した。ただし、飽くまで見えただけだ。

「消えた!？」

そうやって冥琳はクアンタのある場所へと歩き、右手を前に出してみる。すると、手が何かを押すような形で止まった。

「なるほど、ここにはあるけど私の目には何も無いように見える。」

隠すには打ってつけたが、ここでは誰かが間違っただけかかってもお

かしくないな。」

「冥琳はどこがいいと思う?」

彼女ならいい場所を考えてくれるだろう。

何分、袁術がどんな人物かが分からない以上、俺だけで判断するのは危険だ。

「この大きさなら裏に森とその先に湖があるからそこに置けばどうだ?そこにはまず私達以外で来るものはいない。」

それで納得した俺はすぐにクアンタに乗り、その場所へと向かった。

数分後、冥琳が言っていた森を抜け、湖まで辿り着いた。

空から誰もいないことを確認し、着地する。

クアンタを座らせヴェーダに通信を繋げると、ディスプレイから小さなティエリアの姿が現れた。

「少し落ち着いたから、状況を説明する。」

「分かった、話してくれ。」

ティエリアに簡単に説明すると、ティエリアの表情が段々と渋くなっていた。

「君の話からすると、後漢時代末期といったところだろう。しかし、真名というのがあること、孫策など歴史上の人物が女性になっていくこと、そして…何故か本来いるはずの孫堅がいないことなど相違点が多い。やはりパラレルワールドだという線が濃厚だな。」

「孫堅というのは？」

「本来なら孫策の父親というのが普通だが、ここではおそらく母親だろう。いないと言ったが、既に亡くなっているという可能性もある。」

「ティエリアは量子演算システム『ヴェーダ』とリンクしていることで情報を引き出すことも出来る。」

「当然、歴史も引き出せるが、どうやらヴェーダ、ひいては俺たちの知る歴史と違いが多いようだ。」

「つまりは、どのみち俺達の知る歴史通りになることはないということか。」

「そういうことだ。」

「しかし、どちらにしても同じだ。この世界にイレギュラーとなっているイノベイドがいる限り。」

「ならティエリア、頼みが…。」

「言わなくても解っている。その強力な力を持ったイノベイド、どうにも気になる。過去…それもソレスタルビーイングが武力介入開始前までにヴェーダの元に戻るでもなく消えたイノベイドが1人い

るらしい。詳しくは解り次第連絡する。」

テイエリアはそう言って姿を消し、俺もクアントのリポーズを開始、迷彩被膜で隠して雪蓮たちの館へ戻っていった。

呉02・蒼き巨人〱00 Quant〱T〱〱（後書き）

何というか、今のところ刹那としては冥琳が一番好感持てるという感じの印象になってしまっています。それと性格違っちゃっているか心配になってきました。

あと、プロローグと呉01とでおかしなところがあったので余裕が出てきたら修正します。物語に関わるものではないのですが、説明不足というのも変なので。

呉03・黄巾党からの奪還（前書き）

まずは東北関東太平洋沖地震での犠牲となった方への哀悼の意を表します。

そして、日本の復興を願っている皆様に御礼申し上げます。

私も2000円と少ないですが、義援金とある市役所を通して救援物資を少し遅らせていただきました。

私は2日間の断水と停電、約2週間のガソリン不足で済みました。

約2ヶ月ぶりの更新となってしまいました。特にこの小説が約4ヶ月ぶりで大分待たせてしまいました。

その割りに中身が薄くなってしまったのは私の不徳の致すところであります。

しかし、活動報告で書いた通りあまり安定した状況ではまだないため、不定期更新におそらくなってしまうかと思えます。

そのところはご勘弁願いたいと思います。

呉03・黄巾党からの奪還

（刹那）

この世界に来てから数日が経ち、目が覚めた俺だったが未だにこの世界の空気に慣れないのか、イマイチ動きが鈍い。

それでも雪蓮たちの、呉という国にいる以上は慣れる必要がある。

この数日間で、GNソードVとGNソードビットの仕組みを調べてみた。

解ったことは、俺の脳量子波でそれぞれの武器の形態を変えられることだ。

GNソードVはライフルモードへの切り替えとビームの発射が出来る。ソードビットとの連結によるバスターソードも気絶しない限りは出来る。

しかし、バスターライフルは連結出来ても砲撃もライザーソードも出来なかった。

ソードビットは連結の他に、リング状に展開することで出来るGNフィールド、収納したグリップを展開した状態での剣としての役割、そして本来の使い方であるビットとして全方位からの攻撃と用途が多い。

ただし、ビットだと半径20m、時間だとおよそ1分が限界だ。

自分が寝ていた布団から出て、ネイビーのアンダーズーツから変えのアンダーズーツとクアンタに何故か入っていた青いソレスタルビーイングの制服へ着替える。

が、着替えている途中でドアが開いた。

「おはよう刹那、冥琳から話がある……ってあら、良い筋肉してるのね。」

入ってきたのは雪蓮で、近付いて二の腕を触ってくる。

幸い、既にズボン履き終えているものの上半身裸だ。

本当はあまり気にしないのだが、いつだったかトレミー内でフェルトが俺の部屋に入ってきたことがある。その時に上半身裸で顔を真っ赤にして退出したというのをスメラギに見られ、『女の子の前であまり上半身裸は見せては駄目よ。フェルトは刹那が気になってるんだから。』と言われたことがあったのを思い出した。結局、何故フェルトの何を気になっていたのか聞けずじまいだったが。

擦くすくつたいこともあって、雪蓮に背を向けて着替えを続ける。

「雪蓮、次から用がある時はドア…戸を叩いてくれ。流石に着替えているときはいきなり入られると困る。」

「天の国ではそうなの？」

彼女に悪気はないのは昨日で解っているが、『天の国』と呼ばれて

いることには少し抵抗がある。

対話が終わった頃にはほとんど紛争が無くなっていたものの、今までの人生を思うと綺麗な部分だけを雪蓮たちが見ているような錯覚をつい覚えてしまう。

…こんなことを思うとは俺もまだまだだ。

「ちょっと、無視しないでよ！」

と背中を向けながら横目に見る。すると雪蓮が質問されたのに答えなかったことに腹を立てたからか、睨みながら頬を膨らませて不機嫌そうにしていた。

ジャケットを着て雪蓮の方へ向き直す。

「すまない、考え事をしてしまった。…天国という言葉は少し違和感を感じるんだ。俺がいた世界では争いが絶えることはなかった。

」

俺の言葉を聞いた雪蓮の表情が真剣で怒りを含んだものへと変わった。

「違うわ、争いが絶えないのはこっちも同じよ。特に最近では黄巾党という女子供関係なく民を殺して物を奪う集団がいる。冥琳の話はそのことについても含まれているわ。とにかく付いて来て。」

着替え終えた俺は黙って付いて行った。

雪蓮に付いて行くと、庭園で冥琳の姿が見えた。

そこで祭と穩も話し合っている。

「来たか。」

「ここで話すということは、漏れてはまずい内容なのか？」

「そうじゃ、よく分かったの。が、今その話は終わったところじゃ。」

分かった理由は、ソレスタルビーイングが武力介入を開始したばかりの頃にマイスターで軌道エレベーター・天柱へ集合する時に周りに警戒として同じようにしたことがあったからだ。ただ、俺たちの場合は念を入れるという意味合いの方が強かったが。

「それで、雪蓮から冥琳が呼んでいると聞いてここに来たのだが用件は何だ。」

「うむ。実は刹那には武官と文官のどちらかで働いてもらいたいのだが、どちらが得意だ？」

冥琳が聞いてきたのは呉での今後の俺のあり方だった。答えは決まっている。

「武官だ。元々、俺には戦うことしか出来なかった。」

今は脳量子波での対話も出来るが、やはり長年積み重ねてきた戦いが俺に一番出来ることだ。

「そうか…本来なら祭と一手手合わせしてもらって実力を確かめると言いたいところだが、実は最近国中を蔓延ってる黄巾党という一団が私達の領土にある小さな村を襲っているという報告が今しがた入ってきたんだ。」

雪蓮が言っていた集団か。格差と貧困が多いこの状況では酷いことになっているだろう。

「つまりは、誰かと一緒に討伐をしに行けということか。」

「察しが早くて助かる。刹那には祭殿についていってもらうことになる。」

「それを聞いた以上は、実力を試す目的でなくとも、たとえ一人でも俺は行く。」

ソレスタルビーイングのガンダムマスターは、争いを生むものを倒す存在。

今の俺は対話から入るが、通じないのであれば武力を以って駆逐しなければならぬ。

人と人が分かり合えること、たとえ相手が牙を剥こうとも、相手が少しでも分かり合う気持ちを持っているのなら通じるのだと信じているのだから…。

クアンタに乗っていく訳にはいかなかったため、予め用意された馬に乗って移動している。

祭と共に向かうのはいいが、俺は今まで馬に乗ったことがない。それ以前に馬のように生きている動物に乗ったことが無いのだ。そして、今回は時間がなかったためにソードビットは置いてきた。

だが乗り心地はそう悪くはない。MSの速さに慣れていたせいか、馬の蹄で地を蹴る音を楽しめるぐらい馬の走る速さをそう速く感じなかった。むしろ風を感じることも楽しむことも出来た。

だが、風によって火によって焼けた土と血の混ざった臭いが運ばれて来た途端に気を引き締める。

村と思われる石造りの古い民家が幾つもある集落、ただしその民家から火の手が上がり、民家の周辺は村人と思われる男、老人、子供まで血を流していた。

「おい、大丈夫か!…」

馬から降りて、倒れてる村人に声を掛けるも、全て息絶えていた。

あるものは心臓を一突き、あるものは斬首、あるものは背中を袈裟懸《けさが》けに斬られている。

「ぬう、随分やられておる…。酷い惨状じゃ。」

祭は悔しさと憂いを帯びた瞳でその惨状を見渡す。

その惨酷な光景から、もうずっと思い出すことのなかったガンダムに出会う前の… K P S Aで少年兵として戦わされたあの記憶を思い出す。

だが、思い出して立ち止まっている場合ではないと首を振って意識を目の前の惨状へと戻す。

がふと見直すと女性が一人としていないことに気付く。

「女性が一人も見当たらない、奥へ向かう！」

嫌な予感がした俺は祭に呼び掛けることも忘れて駆け出す。

「あつ待て、刹那！」

生存者がいるかもしれないと思い、先へと進む。

奥へと急ぎ走ると、俺たちが通った所と反対側である村の入り口にたどり着く。そこには剣を首筋に突きつけられて怯えている女性と、黄色のバンダナを被った男が三人で女性を脅していた。

俺は燃えきって炭になった建物の陰に隠れる。

「おい答える、お前はここで俺の女になるのか、それともここでひん剥かれて全裸のまま犯されて死ぬのか、どっちだ！」

顎鬚を生やした男が女性に向かって怒鳴りつける。

怒鳴られた女性は怯えるあまり、涙を流すも声が出ないようだ。冬の寒さに悴《かじか》んでいるように歯を力チ力チ鳴らしているあたり、余程恐がっているのが解る。

…急いで開放しないと自分で舌を噛み切る、なんて最悪な結末にもなりかねない。

対話をする前に女性を救わなければならない。

「へへへ、兄貴よお、早く犯しちゃまおうぜえ!」

「早くこの女を孕ませちまおうぜ!」

…前言撤回、この男たちは救いようが無い。

その歪みを駆逐する。

足元にある石を左手で拾い、サイドスロー気味に投げる。

投げてすぐさま駆け出す。

「がつ!」

投げた石は女性の後ろにいた男の眉間に命中する。

「何者、ぐへえっ!」

それを目で確認する前に、剣で脅していた男の顔面に飛び蹴りをし

て吹き飛ばす。

「あ、兄貴！てめえ、この野郎！！」

短剣で横から斬りかかる残りの一人。

「しゃがめ！」

「きゃあ！！」

女性の返答を待たずに肩を掴んで、一緒にしゃがんで避ける。

避けたところで、GNソードVで短剣の刃を斬る。

切れ味が鋭く、断面が綺麗に見えていた。

「なっ、剣が剣に斬られた！？…ひいつ！！」

半ばから切れた短剣を凝視している男に切っ先を向ける。

「言え、貴様たちは何故こんなことをする！！」

「ぐっ……決まってるんだろ、生きるためだ！そのためなら他人なんてどうでもいいんだよ！！」

地に這い蹲りながら、狂気を孕んだ笑みで答える三人のリーダー格である男。

大方、漢王朝への当てつけという名の八つ当たりを苦しんできた自分たちなら許されると自分勝手な考えを持ったことで人から様々なものを奪うことに抵抗を持たなくなったといったところだろう。

石を眉間にぶつけた男が気が付いたか。

「生きるために…他人に犠牲を強いることは間違っている！その貴様も同じだっ…！」

女性の後ろにいた男が剣を振り上げていたため、すぐに刃の根元の部分を斬り落とす。

「は？…げふっ…！」

男が刃のない剣を凝視している間に右足のミドルキックで脇腹を打つ。

男は地面を転がって5mぐらいで停止、泡を吹いて気絶した。

「だったら、女を…。」

短剣を折られた男が女性の首に手を伸ばそうとしたのが見えた。

止むを得ず、GNソードVを脳量子波でライフルモードへ切り替える。

そして、GNソードVに付いている二つの銃口から桃色のビームが放たれ…女性の首を掴もうとした両手を消し炭にする。

「あ、あa a A a a A あa a A a あa a A A A a あa a あ

.

吳03・黄巾党からの奪還（後書き）

黙っていようかと思っていましたが、ここで一つネタバレを。

嫌な人はここで戻って下さい。

魏に一刀、蜀にライルが来ます。

ただし、一刀は設定弄るかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7034o/>

蒼穹と紅蓮のクアンタム

2011年4月9日20時22分発行